

# 建築設計事務所という「場」をつくる

*How I Founded a Place to Design Architecture*

竹山 聖

学生時代に立ち上げた建築設計事務所、設計組織アモルフが今年で30周年を迎えた。正確に言えば、1983年7月27日に株式会社として発足させてから30年である。そこにいたる少しばかりの前史もある。よく続いてきたものだという思いもないではないし、それなりの充実した仕事を成し遂げてきたなという感慨もある。時代も社会も変わっているから果たして参考になるかどうかかわからないが、若い世代がこれから建築設計の道に乗り出していくために、こういう道もあるのか、というささやかな励みにもなればと思い、この機会にその頃のことを書き記しておこうと思う。

そもそも記憶というのはあやしい。脚色もあるだろうし、忘却もある。ただ幸いに記録がある。『都市住宅』1985年7月号の特集だ。AMORPHE STORYと題された文章を追いながら、当時の「気分」とでもいったものを発掘してみよう。文章はこのようにはじまっている。

20代の前半と言う年齢は、たいていの人間にとって、定まらぬ形の記憶としてしか想起し得ぬものではないだろうか。何かしら熱いたぎりと歯がゆい思い、それにどこか後ろめたさに似た感覚とがない混ぜになって渦を巻いている。

そんな、定かならぬ形の——アモルフな——記憶の層として。

いつの時代でも変わらぬことだろうが、当時、われわれの周囲でも、あらゆる分野でさまざまな若者が助走を開始しつつあった。助走の内に胚胎される思念は、期待と不安とに占拠される。助走とは、そのスピードとリズムとタイミングとを冷静に測定しながら、心身の緊張と充実と自らを賭すためのプロセスであるのだから。ただ一瞬の跳躍に向けて。

この文章を認めた時の私はちょうど30歳であった。そのことが20代にちょっと距離をとったような物言いを促している。58歳の今からふりかえれば、十分若々しい気負いに満ちあふれている。

ともあれ、私は1977年に京都大学を卒業して東京大学の大学院に進み、79年には博士課程に進学し、20代最後の年の84年春に満期退学（そんな言葉があるとしてだけでも。つまり単位は取得し学期限いっぱいまで粘っての中退である）して30代に突入したばかりだった。磯崎新も黒川紀章も同様の期間博士課程に在籍し、博士号をとらずに退学している。磯崎はその著書『空間へ』で博士課程のことを「潜在的失業者の巣窟」とうまい表現で呼んでもいる。まさに言い得て妙と言ったところだろう。

株式会社にした1983年7月には28歳だった。その翌年に博士課程から退学した。つまり大学院時代に株式会社の代表取締役になった、ということになる。今風に言うならベンチャー企業のアントレプレナーである。もちろんそんな言葉も知らないし、気分も実情もかけ離れている。しかし自分自身の拠点をもったという晴れ晴れした気分は、あった。さてその前史である。同じくAMORPHE STORYから。

設計を志す大学院の学生が、折あらば在学中から実際の仕事にありつきたいものだと夢想することは、そう珍しいことでもない。むしろありふれたことだろう。ただアモルフの場合、それを夢想に終わらせずに実践へと結びつける具体的な方法を模索しただけのことだ。最古の記録は、78年の5月に遡る。それによれば、都市工学科での磯崎新の講義を受け

たあと、正門前の雀荘において打ち合わせがなされた、とある。

その時の面子は、小林克弘、竹山聖、榎本弘之に加えて、今は URTEC にいる亀掛川叔郎、それに今回の特集にあたって暖かい一文を寄せてくれた隈研吾の5人である。おそらくは二抜けであったと思われる。

ただし隈研吾は、つねに身近にいたものの、実際の活動には加わらなかった。結局、小林、竹山、榎本、亀掛川の4人が発足メンバーということになる。名前をつけること、名刺をつくること、仕事を求めること、そして万一仕事きたなら逃げずに受ける腹を固めること。アモルフの出発点はこれだけであった。

麻雀を知らない人のために説明しておく、「二抜け」とは、4人で打つ麻雀で二番目になった人が抜けて交代する打ち方を言う。麻雀は当時の学生の社交の場であった。

小林は香山研、榎本と亀掛川は芦原研、隈と竹山が原研である。香山研と芦原研は本郷にあり、原研は六本木の生産技術研究所にあった。しかし授業の多くは本郷で行われ、都市工学専攻など他専攻の授業も本郷だったから、本郷には足しげく通っていたはずである。『SD』のコラム、グルッポスペッキオの打ち合わせもほぼ同じメンバーだったから本郷で行っていた。グルッポスペッキオのメンバーには今は名古屋大学にいる片木篤（香山研）、そして明治大学にいる小林正美（芦原研）がいた。ただし片木は麻雀をたしなまなかった。小林正美の不在は、たぶん彼が学部では一年学年が上だったからだろう。もちろん私は外部からの入学だから、東大の友人たちの仲間に徐々に入れてもらう、というポジションである。亀掛川は一年学年が下だったが、小林克弘の高校の同級生、ということで、一緒に雀卓を囲む親しい関係にあった。

さてアモルフという名称はこの時点では決まっていない。この日の打ち合わせ、というか雀卓を囲みながらの「夢想」話のあと、小林克弘と電話で話をしていた「アモルフ」でいこう、という話になった。

われわれは二人とも大江健三郎の熱心な読者だったのだが、当時大江はよく「不定形」と書いて「アモルフ」とルビをふった。私はとりわけ『万延元年のフットボール』の冒頭、「夜明けまえの暗闇に目ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手さぐりする」という文章が好きだったから、建築家になる「夜明けまえ」の気分に「不定形／アモルフ」という言葉も語感もぴったりきた。私の下宿の電話は共同のピンク電話だった。「アモルフ」でいこう、と決めて受話器を置いた公衆電話のピンク色は、今も目に焼きついている。

話はずれるけれども、携帯電話やメールではこんな場所や状況の記憶はあまり残らないのではないだろうか。遠方に電話するために100円玉をいっぱい握りしめて冬の公衆電話ボックスにこもり、黄色く巨大な電話機にかじかむ指でコインを滑り込ませていく、というような、まるで身体中にしみわたっていくような経験や記憶なんてものは、もはやないのである。ピンクの呼び出し電話にせよ、凍える夜の電話ボックスにせよ、確かに不便この上ないシステムではあったのだけれども。

かくして名前が決まり、そして名刺をつくった。アモルフだけでは何の仕事かわからないだろう、とアモルフの前に「設計組織」とつけた。つまり「設計組織アモルフ」である。なにやら建築設計事務所らしい気配は出ている。そんなふうに思えた。

夢だけ豊かな建築家の卵たちだったが、社会状況は厳しかった。1973年秋に訪れたオイルショックによる不況はわれわれの世代を直撃した。73年春に大学に入学した時はまだ60年代高度成長期の余韻や70年万博の残り香が漂っていた。それがオイルショックで暗転し、我々の世代の就職状況は惨憺たるものであった。もしわれわれの世代に特徴があるとすれば、いくら学生運動やって暴れても就職順調のプレ・オイルショック世代（団塊の世代）と安定成長に入ってからすっかり安定志向が根づいたポスト・オイルショック世代に挟まれて、価値観の転倒の波をまろにかぶった不安定感が身体にしみこんでいる点かもしれない。AMORPHE STORYにはこうある。

高度成長最後の一波に乗って大学には入ったものの、出る時には安定成長どころかマイナス成長で就職もおぼつかず、いわば社会に軽く肘鉄を食わされて軽いニヒリズムに陥ったわれわれは、オイルショック世代とでも呼び得るのだろうか。カタストロフと呼ぶほど大袈裟なものでもないが、気分として価値観がひっくり返り、熱狂と心情的脱落を併せ持っている。いわばアモルフな気分を共有しているのである。

要するに仕事はなかった。仕事のあては限りなく無に近かった。建築家などという職種は消えてしまうのではないかと、とも思えた。少なくとも、巨大プロジェクトなどはもう現れず、一生ささやかな住宅を設計していけるだけでも望外な喜びだと思えた。実際、原広司も篠原一男もそのように住宅の設計を通して建築デザインの可能性を開き、建築の喜びを表現していた。出現しつつあったひとまわり上の世代、つまり横文彦の言う「野武士たち」（安藤忠雄や伊東豊雄の世代である）の活動の場も住宅だった。磯崎新も「もう何もつくれなくなった」というポーズをとって「反建築」や「都市からの撤退」を標榜していた。原広司は有名な「住居に都市を埋蔵する」という言葉を投げかけた。1970年から85年の15年間は「解体と批評の時代」である。（もちろん磯崎の「解体」と篠原の「批評」を含意している）この時代に能天気な建築を設計しているなど、批評精神のない馬鹿の所業である。経済もシュリンクしている。大規模開発など愚の骨頂。構造表現主義は滅亡した恐竜のようなもの。モーレツからビューティフルへ。社会の潮目が変わってきていた。そんななかでの「夢想」の船出であった。

それでも不思議なことに、仕事を探すという目で世の中を見回すと、話はぼちぼちと転がっていないでもなかった。亀掛川の紹介で小田原の住宅を設計し、スケッチを原広司に見せると丁寧に助言をしてくれて「いつの時代にも若い世代に仕事を頼もうとする人間はいるものだ」と励ましてくれた。考えてみれば原広司自身がRASというグループをつくって学生時代から建築活動をはじめていた先達だったのだ。アモルフと命名した小林君との会話でもRASを意識していたことを思い出す。「なにしろ歴史に残る名前になるんだから、慎重に決めないとね」と笑顔で（電話だから見えないわけだがそうに決まっている）語る小林克弘の明るい声に、なんて楽天的なんだろう、でもそうなんだよなきつと、と納得したこともよく覚えている。

同好会の延長のようなノリでの設計事務所設立話は、確かに学生ならではの気楽さもあったかもしれない。しかし、私は本当に就職をしないで生きていくにはどうすればいいかと真剣に考えていたし、この「夢想」にしても内心では本気だった。

磯崎新も黒川紀章も原広司もどこにも就職しないで建築家になっている。篠原一男もそうだ。磯崎、黒川は丹下研で設計実務のトレーニングを積んでいたし、篠原は大学にずっと拠点を置いていた。しかし、とにもかくにも、どこにも属することなく生きていく道筋はきつとある。のたれ死にはしないんじゃないか。『ぼんやり空でも眺めてみようか』の帯にも選んだ言葉だけれども、「食うや食わず」でも設計をして生きていきたい。そう思ったのだ。気持ちの強さと楽天性。自分については、そして才能もある、という根拠のない思い込み。そうしたものがおのずと人生を開いてくれる。信じる者は救われる、というのはそういう意味だと私は思う。自分はしかるべき人間になれる、という思い込み、信念のようなものが、生きる態度や人と接する時の説得力となって現れるのだ。前向きな姿勢、目の輝き、この人と一緒に仕事をしてみたいと思ってもらえるような、そんな心の強さのようなものが。自分を信じていない人間を、他人が信じてくれるはずはない。

79年の夏には大阪の三国にテニスクラブハウスの設計する機会が訪れた。これは私の持ってきた仕事である。夏休み中の原研を借り、小林克弘が協力してくれ、榎本、亀掛川が参加したが、原研での一学年下の宇野求が一貫して作業をしてくれた。9月に小林と竹山が大阪に出かけ、プレゼンテーションを行った。門型のフレームに曲面壁が納まった三角形プランのクラブハウスだったが、このとき図面を見せた原広司と安藤忠雄と高松伸がそれぞれアールの壁を、ベニヤでうまく納まるよ、鉄板やねアールは、左官でやったらええ、と三者三様だったのが面白かった。

残念ながら仕事はとれなかったのだったが、このとき訪れた高松伸からも設計事務所に勤めることなくいきなり事務所をはじめることについて「やればできる」と励まされた。高松も大高正人の事務所にほんの少し勤めただけで京都に戻り、川崎清の設計を手伝いながら、ほぼ独力で設計実務を学んだ経歴を持っていた。安藤忠雄も何か月かずついくつかの事務所で修業を積んだものの、基本的には独学で建築を学び、事務所を始めている。つまりわれわれの回りには実はお手本があふれていたのである。原研の先輩たちも一人で道を開いている人たちが多かった。山本理顕もそうだ。

おそらく環境が才能を育て、道を決定する。そこに自身の意志を重ね、人は進む道を選びとっていく。東大に進んで原広司の研究室に入り、小林克弘らに出会わなければ、おそらく今日の私はずいぶん違った人生を歩んでいたことだろう。

そして決定的だったのが宇野求との出会いだ。79年の秋、ついに実現に至るプロジェクト「本所の家」が宇野によってもたらされた。原研の2年後輩の竹内晶洋もこのプロジェクトに参加した。アモルフの最初の事務所らしき場所は小林克弘が80年3月に結婚して新居を構える神奈川新町の玄関脇の一室となった。80年の正月明けからは作業が本格化し、2月には修士論文を書き上げた宇野も参加した。小林はといえば、この頃から香山アトリエを手伝い始めたので、帰宅を待って深夜の打ち合わせが主となった。結局のところ基本設計は私が中心となってまとめ、実施設計の段階で原研に場所を移した。さすがに新婚さんの新居に居候では申し訳ない、と考えたのだ。

構造設計は宇野の同級生で、現在は名古屋大学で教えている勅使川原正臣が担当した。当時勅使川原が所属していた岡田研も生産技術研究所にあったので原研での作業はちょうど都合が良かった。勅使川原の指導のもと、全員で手分けして配筋図を描いた。「同じ高さに梁が通ってないと設計できないよ」という勅使川原の指示にもとづいて設計したから、

とてもとてもシンプルな構造体になった。法規的にも制約が大きく、さらにコストが限界的でもあった。のちに安藤忠雄からはプランがシンプルでよい、とほめられたが、実はなかば技術的な限界によるものでもあったのだ。

実施設計は納まり詳細図集や原広司の図面、そして安藤忠雄から貰ったいくつかの住宅の詳細図を参考にしながら必死で描いた。なにしろ現場監理の経験ももちろんないのだ。役所や近隣との対応はじめてづくしで懸命に対応した。人の話を聞くこと、相手の気持ちを慮ること、わからないことは想像力を働かせて精一杯考えること。現場の監理にしても同様だ。人の話を聞き気持ちを押し量り精一杯想像力を働かせる。帰って調べる。勉強する。そしてどうしてもわからなければ、聞く。謙虚に、そして卑屈にならずに。何事も絶対の解答はなく、よりよい納まりや素材を追求してゆく。設計の段階でも現場の段階でも。建築の設計には、いやそもそも人間のものづくりには、絶対はないのだから。ベストを尽くすしかない。逆に無知であることが謙虚さや緊張感や注意深さを生むこともある。つまりはなにごとでもいい方に解釈して前向きに進むということだ。そして困難にぶつかったら、全力でそれを突破する努力を重ね、あとは運を天に任せるしかない。決して投げやりな態度でなく、真摯に受け止めて。「どんなにたいへんな現場でも、あとになったら笑い話や」という安藤忠雄の教えをそっと心の奥で反芻しながら。

春休みの原研でせっせと図面を描いていると、原広司から「やはり設計事務所を立ち上げるんだったらきちんと場所を借りてやった方がいいぞ」と助言を受けた。原研を借りて、というのはいくら緊急避難でも虫がよすぎる。そこで「本所の家」が着工してしばらくたった80年6月に、豊島区高田の学習院下にマンションの一室を借りて事務所とすることにした。80年8月には一級建築士事務所登録をする。宇野求が開設者、そして私が管理建築士である。前年の12月に一級建築士試験に通り、1月に免許登録をしたばかり。いまは3年の実務経験がないと管理建築士になれないが、当時はすぐになることができた。だから一級建築士事務所の開設は1980年8月である。つまり自営業だ。これを株式会社としたのが1983年7月。そこから数えて今年が30年。

実質的に仕事を始めた79年を創設、一級建築士事務所開設が80年、83年を株式会社の設立、という具合に使い分けている。だからアモルフ設立前史は4、5年ということになる。まあ、はじめは曖昧なものだ。制度や法律や登録という社会との接点において初めて日付が確定する。

「本所の家」は80年12月に竣工した。81年6月号の建築文化にも掲載された。撮影はなんと巨匠の大橋富夫である。工事会社は北川フラムから紹介された共同計画で、当時北川フラムたちが経営していた渋谷の傘屋で見積もり調整をし、少ない予算に収めてもらった。構造設計はエステックの大沢良二から紹介された今川憲英に念のためチェックを受けた。つまりは、初めてにしては、というより、初めてなのに、とても素晴らしいメンバーに支えてもらえた仕事だったのだ。

幸運なことに第二作も続いて仕事きた。「新宮の外科医院」である。これも宇野求からもたらされた仕事であり、81年3月に着工し12月に竣工した。延べ240坪、総工費1億7千万の大きなプロジェクトだ。構造設計は晴れて今川憲英に、設備設計は今川からの紹介で丹野昌美をお願いした。この二人はその後アモルフのプロジェクトのほとんどをずっと兄貴分のように見守り、助言や指導を与えながら協働してくれている。頼りになる

エンジニアと出会うことも、設計事務所を始めるにあたってとても大きな要素だと思う。「夢」もたいせつだけれども、現実化する技術や人の輪はもっとたいせつだからだ。

1982年に第一回のSDレビューが始まり、アモルフは82年、83年と連続して最年少入賞を果たした。86年には湘南台文化センター、第二国立劇場、愛知県立文化センターという3つの大きなコンペに続けて入賞あるいは高い評価を受けた。仕事がほとんどなくなった時もあるけれども、とにかくにも何とかやってこられたのは、人の輪に恵まれたからだとしか言いようがない。

さて、先ほど引いた文章の一節に「暖かい一文を寄せてくれた隈研吾」とあった。いまあらためて読み返せばその慧眼には恐れ入らざるをえない。彼はこの文章が書かれた85年当時は戸田建設を辞してコロンビア大学に研究員として渡ろうとしている時で、さまざまな将来を構想していたところだったろう。その構想の中に建築家という道が果たして含まれていたかわからない。ともかくそれでもいままでの建築家然とした建築家、という形ではない建築の道を考えていたことは間違いないだろう。彼は「アモルフの偉大なる功績」と題してこのようなことを書いてくれている。

1973年当時、東大100年の歴史のなかで隈たちの世代の成績が最も高く、「すなわち、建築学科に入るのが最も難しかった」のだと（これはまあ京大も同じだ）書いたあとで、高度成長の余波と万博による「<建築家>という幻想」について触れ、こう続くのである。

ところが、その胸の高揚と若者らしい矜持の念を打ち砕くようにして、その1973年の秋に石油ショックがおとずれる。タイミングがあまりによすぎた。いつかは明らかになるはずのことを、石油ショックがあまりにもあつげなく、そして突然に明らかにし、目の前に叩きつけたのである。建築業界がどちらかといえば斜陽産業であり、建築家が社会のリーダーどころか社会のお荷物らしいということが、はなはだ残念ではあったがわかってしまったのである。高いはしごを登って建築学科に入ったところが、急にそのはしごをはずされたわけである。はしごが高かった分だけ、落ちた痛みも身にしみるといえる。この痛みが、アモルフを生み、われわれの世代の生き方を規定することになった。

見事な分析である。軽快洒脱な文章でもある。大組織設計事務所とゼネコンを経由して、新たな道に踏み出そうとしていた隈にとって、「社会のお荷物たる建築家」という自覚に立った建築家像を新たに築き演じなければならない。そういう周到な読みもあったかもしれない。さらにこう続く。

アモルフの功績はなんだろうか。建築的な功績はいろいろあるだろうし、これからもっとももっと増え充実していくことに違いない。しかし、最も輝かしい功績は別のところにある。大学を卒業し、大学院まで出たものの、どこかに勤めるでもなく、テニスをしたり女の子の尻を追っかけたりしながら、何となく建築したり、ふざけたような文章を書いたりしてフラフラしているうちに、人は建築家になってしまうこともある、ということを彼らは身をもって示したのである。こういう建築家への経路もあることを示したことこそ、彼らの最大かつ偉大な業績だと私は考える。大事務所やゼネコンに勤めればひとまずは生活の安定を得られただろうし、アカデミズムの確固たるヒエラルキーに呑み込まれてしまえばそ

れなりの地位や教職は約束されたかもしれない。しかし、彼らはそういう道はたどらなかった。モラトリアムな姿勢を悪びれることなく貫いた。

石油ショック以後、人びとは建築について何となく悲観的になったり、やたらに堅く堅く考えたりしていたけれど、こんな経路もあるのかと思って、ちょっとホッカリした気分になった。建築もそう捨てたもんじゃないナアと思った。

はしごを急にはずされた世代のヤケクソが、この偉大なる功績を生んだのである。

時代と世代にリンクさせて深刻なテーマをやや偽悪的に書いているが、ある意味ではまったくそのとおりであるし、さらに言うなら、これは時代に関わらない、いまださだかならぬ未来に向かう若さというものに共通するテーマなのではあるまいか。つまり経済の問題や制度の問題、平たく言ってお金や地位、名誉、つまり「現実」、そしてそれらとは別の次元で「夢想」（隈は「幻想」という言葉を使っているが）を追って生きてゆきたい若さの特権ゆえの桎梏、軋轢。賢明な大人は、「現実」を見据えて若さを生きなければならないと諭すし、未来ある若さは、無謀な「夢想」に賭けようとする。

30歳の時点で遠視しすぎた物言いにも見えるが、いま私も58歳の目で読み返して、よく突き放した視点を保持しているなということが半分、あとの半分は当時まだ自分が巻き込まれている問題を天に唾する行為とわかってあえて自虐的に書き記す（「ふざけたような文章を書いたりしてフラフラしている」のはまさに当時の自分自身という皮肉）という勇氣。慧眼というのはそのことも含めてである。

さて若い世代の励みになればと、建築設計事務所開設にまつわる経験を書いてきたのだが、煎じ詰めれば「場」の問題に帰着する。自分が身を置く「場」を、しかも「居心地の良い場」をどのように身の回りにつくりあげるか。

『都市住宅』のこのアモルフ特集では AMORPHE STATEMENT というページが冒頭にあって、以下のような「アモルフの定義」が掲げられている。

1. アモルフは仲間である
2. アモルフは交感の場である
3. アモルフはヒエラルキーを持ち込まない
4. アモルフはひとりぼっちではない
5. アモルフは閉ざさない
6. アモルフは形がない
7. アモルフは誰のものでもない

オリジナルには番号は振っていないが、わかりやすいように箇条書きとしてみた。

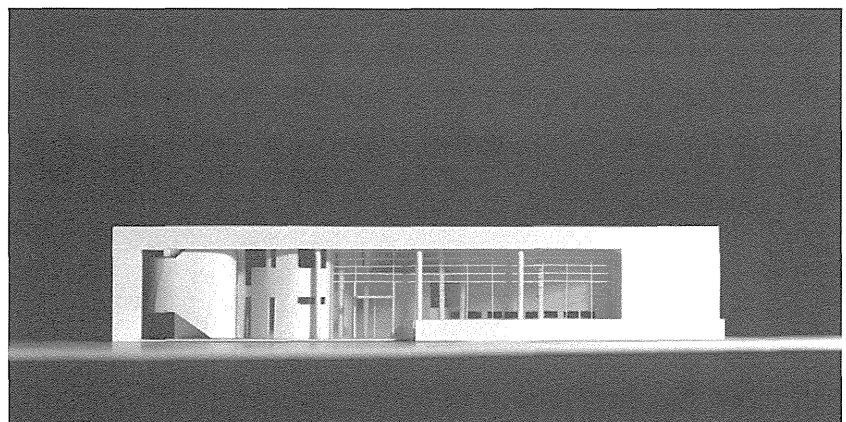
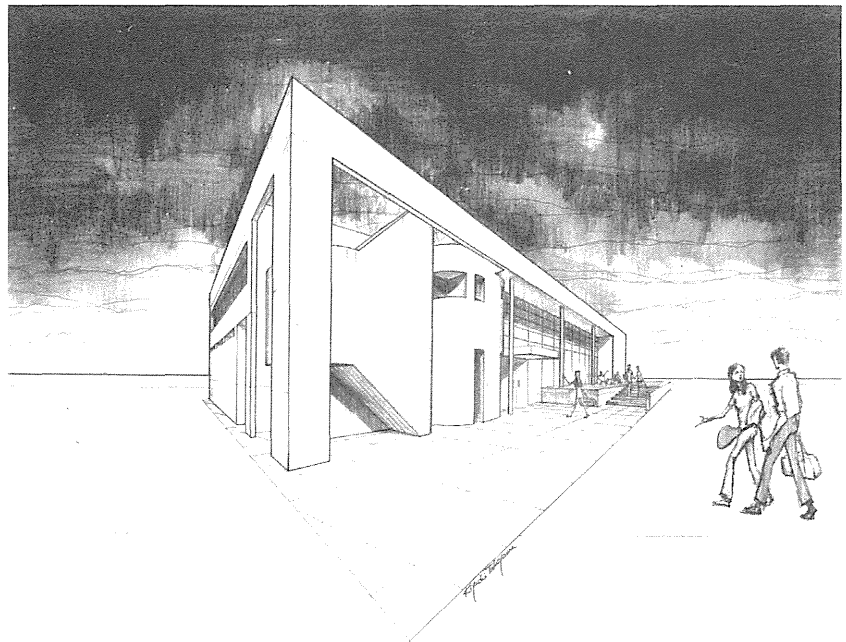
この「仲間である」ような「交感の場である」ような「ヒエラルキーを持ち込まない」ような「ひとりぼっちではない」ような「閉ざさない」ような「形がない」ような「誰のものでもない」ような、そんな「場」を自分の身の回りに築くことができれば、人生はずいぶん素晴らしいものになるんじゃないかと思うのだ。

事務所でも、そして研究室でも、家庭でも、どんな人の輪でも、私は上記のような場の中で生きていたいと思っている。いつまでも理想論を語っている人間はおそらく未熟者だろ

うし、現実はその簡単ではないのも、さすがに60年近く生きてくればわかっている。しかし建築という行為は、「夢想」と近い関係にあるのがその宿命でもある。だからこそ若さは建築という行為に惹かれるのだとも思う。そして、その若さ故の未熟の自覚の中からはか創造的な行為は生まれないのではないか、とも。

もし建築設計事務所という「場」が、そしてそれを取り巻く人の輪が、そのようなものであるとするなら、ありうるとするなら、それはとても素晴らしい人生の舞台となるのではなかろうか。金銭には還元できない価値を、建築という行為はきっと内蔵しているのでもあるから。

アモルフが30周年を迎えた今、28歳の自分自身に向けて、わりかしい選択だったと思うよ、と声をかけてやりたくなるほど、あらためて「場」のありがたさを感じている。



アモルフ最初の協働作業となった「三国のテニスクラブ」(1979)。  
原広司からも安藤忠雄からも高松伸からもアドバイスをもらった。